昭和32年から33年　昭共立八幡神社材伐りだし搬出の思い出　羽石昇

『共立百年史』からの抜粋

（略）昭和２年３月に建立した共立神社が老朽化した昭和32年、区の役員会で新築してはどうかという話が出ました。

（略）戦時中は多くの出征兵士を送り出した神社であり、出征される方はお国のために頑張ってくるので、残された家族と後のことは頼むと言葉を残して、軍歌と万歳に送られてお神酒を酌み交わし出征されたものです。

また、豊作では祝い、凶作では願をかけ、郷土の中心的役割を果たしておったところです。

その後、区総会を開き、神社材として営林署から払い下げを受けました。

お金がないので多めに材をもらい、残った材は売って造営費に充てることで、昭和32年12月24日と昭和33年鳥居材の２年度にわたって事業を行うこととなった。

切り出しの部については役員会一任。搬出は加藤木工場まで共同事業で行う。

（略）役員会から指名された方は、山子が溝口彦二、村本勘一、ヤブ出しは大江俊良、佐々木勲、室田益見、後藤茂夫。ヤブ出し長の大江さんはおもしろいかけ声で皆の力を一つにまとめる役目をしていた。

馬の小林春夫さんは、少し広いところまで集材の役目。平山さんは道路直し。岡崎さんと私はドンコロバチで材を土場まで運んだ。

以上、11名、馬３頭、立木250を石出し入れ、24日から30日まで７日間行い、30日午後３時近くに自宅に帰ってきた。

作業の内容は、11名が前日から布団、炊事道具一式、ランプ、小屋がけ道具、馬の食料、３台のバチぞりで午前４時出発。左の沢はこの年暖かくて、沢水が流れており通れなく、人夫の皆さんが橋を架けて２台までは通ったが、橋はこの２台で持って行かれ、架け直しながら現地に着いたのは午後３時でした。飯場の跡地があったので修理をし、テントの屋根、ムシロの戸、薪造りから夕方のしたく、人生の中でも忘れられない思い出です。目的があったので不平も言わず、平山さんのおもしろい話を聞きながら明日の健闘を誓ったことをもいだしております。

翌33年３月、鳥居材は赤岩の右の山から赤松１本、オンコ４本、青木数本を搬出。現在の鳥居がそうである。

赤松は寸面２尺以上の丸太４コロ、あまりにも良い材なので資金に早替えしたようです。現神社に赤松は使用されておりません。共同事業ということで１日で終わらせたとはいっても、加藤木工場へ下ろして帰ったのは午前２時でした。お菓子１袋もらってね．当時の皆さんとその話になると、花を咲かせてまた１杯ということになる。（略）

＊昭和32年　神社移転の議起きるも現在地にとどまる。

＊昭和33年　池知正勝棟梁となり、流造りで９月吉日神社新築す。

鳥居、オンコで奉納する、